# 忘れられた叡智を求めて　第11回

## 言葉を使わず大切なメッセージを伝える力

言葉を使わず、大切なメッセージを伝える力。

その重要性を改めて感じたのは、先日、フランスのドーヴィルで開催されたG8サミットにおいてであった。

5月24日から29日にかけ、OECD50周年記念式典、G8サミット、日EU首脳定期協議に出席する総理に同行し、パリ、ドーヴィル、ブリュッセルを訪問してきた。

この一連の外交日程においては、OECDでは、クリントン米国務長官、G8サミットでは、オバマ、サルコジ、メルケル、キャメロン、ベルルスコーニなどの国家首脳のスピーチや会場での振舞いを見る機会があった。

小生は、世界経済フォーラムのGlobal Agenda Councilのメンバーも務めていることから、毎年1月のダボス会議において、各国首脳のスピーチを聴く機会には恵まれているが、今回のサミットで改めて感じたのは、トップレベルの政治家は、スピーチが見事なだけではなく、その眼差し、表情、仕草、呼吸、沈黙、姿勢、歩き方などを最大限使って、大切なメッセージを伝えてくることである。

例えば、クリントン国務長官は、OECD式典の議長として、未曾有の震災と津波の被害を受けた日本の菅総理を壇上に招くとき、慈愛に満ちた深みのある表情を見せ、日本国民と被災者の方々への言葉にならぬ温かい思いを伝えてきた。

サルコジ仏大統領は、切れ味の良い言葉とともに、身振り手振りを最大限に使って、その情熱や信念を伝え、強い眼差しは、言葉以上に、強いメッセージを伝えてくる。

オバマ米大統領は、各国首脳のラウンドテーブルが行われる部屋に入ってくるときから、年齢を超えた威厳を感じさせる。そして、会議が始まる前に、テーブルの前に立ち、資料を手に取るときにも、計算され尽くした演技であろうか、静けさと重量感を感じさせる佇まいを見せる。

こうした世界のトップリーダーの言葉を超えたメッセージを見ていると、かつて、米国の大統領選において、レーガン候補が、モンデール候補との討論において示した、巧みな表情と仕草を想い出す。

モンデール候補が舌鋒鋭くレーガンの主張を論破した瞬間、レーガン候補が見せたのは、ただ、肩をすくめ、手を広げて微笑む仕草であった。しかし、そのたった一つの仕草だけで、レーガンは、最大の反論を行った。なぜなら、その瞬間に、視聴者からは、モンデールが、好人物を攻撃する悪役のように映ったからである。

コミュニケーション学の研究によれば、言葉によるメッセージの伝達は、コミュニケーション全体の30％程度であると言われている。

そうであるならば、70％を占める非言語的コミュニケーションによって、人々に、いかに印象深いメッセージを伝えるのか。

言葉が溢れる時代であるからこそ、そのことが、指導者には、深く問われるのであろう。

田坂広志

［内閣官房参与
多摩大学大学院教授］